

メディアと音楽文化

はじめに

筆者は保育者養成を目的とした専門学校に勤めている。そこで、表現発表の機会を持ち、学生に内容について考えさせているのだが、どのクラスからも同じような曲と表現方法が提案される。メディアの影響の大きさを感じる瞬間である。

まだ経験の少ない学生にして見れば、テレビで目にしたあのかっこいい音楽やダンスを自分でもやってみたいと思うのは当然であろう。

テレビの保有台数が一家に一台から一人に一台にほぼ近くなっている現在、情報源のほとんどがテレビなどのメディアに起因していると言ってもよい。そこで、ブームの実際を

三小田美穂子

日本音楽学校常勤講師

探りながら、メディアの影響について考えてい。

ブームの変遷

メディアから流れる音楽を受け取るだけでなく、自らも表現するようになったのは、いつからだろう。その端緒となったのはカラオケである。

気に入った曲を選び、そして、演奏する。なかには、CDを買って何度も聞き、カラオケで個人的に練習してうまくなってきたから、友人とカラオケに行くという人もいると聞く。疑似体験ではあるが自己表現の要素を持っていると言えるだろう。カラオケが始まったのは、一九六〇年ごろにさかのぼるが、カラオ

ケボックスが登場した一九八〇年代から大きく飛躍し、現在では、余暇に行う音楽的活動のいつも上位を占めるほど定着している。

一九八〇年代にはバンドブームも起こっている。「平成名物TV・いかすバンド天国」通称「イカ天」(TBS系列)が放映され、人気を集めた。これは、アマチュアバンドの勝ち抜きコンテストの形を取り、五週勝ち抜きとレコードデビューできるという仕組みになっていた。

ここで、注目すべきことは、バンドブームにはロックの起りこりに見られたような、世の中への反発といった要素がないということである。それ以前にはバンドは教育的ではないとみなされ、青少年から遠ざけようとする傾向があった。

しかし、番組に教師のグループも登場したように、バンドは一般的に受け入れられるようになった。これは、バンドが世の中への反抗の表明から、自己表現の一つとみなされるようになったという変化を示しているのではないだろうか。

次にブームになったのが、ア・カベラである。ア・カベラグループ「ゴスペラズ」がヒットしたためもあるだろうが、ゴスペルも一緒に注目されるようになった。高校や大学では



ア・カペラを楽しむ若者たち

合唱サークルは古臭いとされ、部員は減少する一方であったが、ア・カペラのサークルはここかしこに誕生するという現象が見られるようになった。

ア・カペラにスポットをあてた番組も放映された。「力の限りゴーゴゴー!!」のレギュラーコーナーで「ハモネブ」というタイトルの番組である。このコーナーからもプロデューサーへの道が開かれて、ブームを加速させることになった。

そして、現在は、ストンプ（STOMP）やボディパーカッションである。身の回りのものを楽器にするストンプや体を楽器にするボディパーカッションの既成の楽器を使わずに音楽を作るという発想は非常に新鮮であった。ストンプはゴミバケツやデッキブラシなどの身近な物や体を打ち鳴らして、リズムを作り出すパフォーマンスであるが、一九九一年にイギリスのストリートから生まれ、そのスタイリッシュで躍動感あふれる舞台が人気を呼んだ。

ボディパーカッションは、既成の楽器を使わずに音楽を作り出せることから、教育の現場ではすでに取り入れられていたが、注目を浴びたのは、北野武監督の「座頭市」で使用されてからである。タップダンスの要素もあ

り、ダンスと音楽が結び付いていて、非常に躍動感に満ちたものになっており、人々の心をつかむ要素をふんだんに持ったものとなっていた。

心の時代と自己表現

カラオケが定着し、バンドブームが起これたのは、一九八〇年代である。一九八〇年といえ、日本が経済的に世界のトップに立ち、豊かさを実感できるようになった年である。そして、これまでの物質的な豊かさだけを追い求めてきたことへの反省から、心の豊かさが求められるようになった年でもある。

鳥賀陽弘道は「Jポップとは何か」巨大化する音楽産業」（岩波新書）の中でこう述べている。

「所得や学歴の格差が縮小し、日本人が長く夢見た『平等な社会』がほぼ実現してみるとそこにあつたのは『社会の均質化』だった。皮肉なことに、追い求めたはずの『平等化』は『均質化』を生み、かえって人々の『個性』への渴望をかき立てたのである」

そして、人々はメディアからの情報を受け取るだけでなく、それを利用して表現しようと試み始めた。若者は友人とバンドを組み、

大人はカルチャースクールへ通う。鳥賀陽弘道はこの現象を、「自己表現の大衆化」と呼んでいる。

メディア側も自己表現がヒットにつながり、経済効果を生むようになったため、次々と新しいブームを探し出して、提供するようになった。ここに、「自己表現の商品化」が進められることにもなったのである。

ヒット曲とメディア

ポピュラー音楽のヒットの傾向も一九八〇年を境に大きく変わった。それ以前も、曲が人々に知られ、ブームになるには、いつもメディアが関わっていた。人々は、ラジオでヒットチャート番組を聴いたり、テレビの歌番組を見たりして、気に入るとカセットに録音し、レコードを買った。

しかし、「Jポップ」という言葉が生まれ、日本のポピュラー音楽が急成長した一九八〇年ごろからその様相は大きく変わった。CMやドラマとタイアップするようになったのである。そして、ミリオンセラーが生まれた。一九九〇年代のヒットチャート上位の曲はほとんどCMまたはドラマとのタイアップ曲である。音楽業界から見れば、宣伝費をかけずに

曲を流す機会が得られ、スポンサー側から見れば広告料を支払う代わりに楽曲使用料が免除されるといって、双方に都合がよいこともあって、タイアップはますます加速されていった。

タイアップすることによって曲にも変化が現れるようになった。CMとタイアップしたことによって、CMの十五秒間に印象付けられる曲が求められるようになった。このようにして作られた曲は、全曲聞いてみるとアンバランスであったり、そのほかの部分は何かに付け足しに聞こえたりするものも見られるのである。また、商品のイメージに影響するので無難な曲が要求され、社会性を帯びた曲なども敬遠されるようになった。

また、ドラマとのタイアップでは、ドラマの視聴率との関係が大きく、視聴率三十%以上取った番組の主題歌はミリオンセラーとなっているが、ドラマが終わるとヒットチャートの上位から姿を消す。CMとのタイアップもドラマとのタイアップもオンエアされなくなると同時にヒットチャートから消え、さらに新しいCMとドラマのタイアップ曲がクローズアップされることから、楽曲が送り出されるサイクルはますます短くなっていったのである。

メディアが音楽文化に与えた影響

メディアの発達と普及により、その影響は確かに絶大となった。人々がメディアと触れている時間は非常に多くなり、メディアより獲得する情報量は膨大となった。このような状況の下で人々はメディアから提供されたものをそのまま受け入れるのではなく、選択するようになってきた。

しかし、それは音楽そのものに耳を傾けて選択しているのではなく、どんな音楽を聴くのか、どのアーティストを好むのか、どんな自己表現を選択するかによって作り出される自分に関心があるのであり、音そのものが問題なのではなく、付加価値のほうが大切なのである。

つまり、音楽は文化としてではなく商品として扱われるようになったのであり、消費の対象とみなされるようになったと言えるのである。それゆえに、メディアの受け手は常に新しい商品を求め続け、提供者も次々と新しい商品を提供する。文化として定着することなくブームという状態が繰り返されるのである。

二十一世紀を迎え、パソコンと携帯電話の

こんなに笑える
クラシック音楽
があったのか!?



のだめ
王国の
住人たち

千秋真一

(指揮・ピアノ)

「こいつに合わせられるのは

オレ様ぐらいだ!」

世界的な指揮者を目指す、飛行機恐怖症のため海外へ行けない不遇の天才。
変な女(主人公)にもつきまとわれている。特技は料理と社交ダンス。



「のだめカンタービレ」のキャッチ・コピー

普及によって、またメディアも大きく変化している。これに伴い、必ずや音楽にその影響が見られるだろうが、その評価を語るにはもう少しその変化の行く先を見ていく必要があるだろう。

では、最後に時折見られるクラシックブームについて述べてみたい。

クラシック音楽がブームとなる時

時々、クラシック音楽がブームになるときがある。それには、いくつかの要因がある。

第一は、CMで使用されたときである。高級感が醸し出されるといことが用いられる主な理由らしい。CMで使われたクラシックというCDも発売されている。

第二は、クラシック音楽のメロディが引用され、歌詞がつけられて、ヒットしたときである。原曲にも関心が向けられることが多いので、クラシック音楽を聴くきっかけにもなっている。

第三は、クラシック音楽の世界を舞台にしたドラマが放映されたときである。ドラマ内で流れた曲のCDなどが売り出されている。

現在、漫画が原因でクラシックブームが起きている。二ノ宮知子作「のだめカンター

ビレ」(講談社・KC Kiss シリーズ)という漫画で、二百万部を超える大ヒットを記録している。舞台は音楽大学、ピアニストを目指す「のだめ」こと「野田恵」と有名ピアニストの息子で、指揮者を目指す「千秋真一」が中心となって話が進む。

音楽大学の様子がリアルに描かれていて、漫画としても興味深いのだが、そこに登場する音楽をきっかけにクラシック音楽に関心を持った人もいられるらしい。

ホームページにも「漫画からはじめるクラシック」や「のだめカンタービレからのクラシック入門」などのブログが見られ、登場する音楽の説明と推薦するレコードやCDの紹介がされている。とうとう登場人物の「千秋真一」が指揮をしているというCDが発売されるほどの盛り上がりを見せている。

CMでも漫画でもよい、クラシック音楽に興味を持つきっかけになってくれればと、こういう話を聞いたり、現象を見たりして往々にして思う。

しかし、音楽が消費の対象となっている現代では、やはり一つのブームにすぎないとみなすべきなのである。